

研
究

社會哲學の基本問題

——社會對個人の問題を通じての
左右田哲學への一省察——

南 亮 三 郎

本稿は往年左右田博士の指導室に列なりし頃の、私の貧しい收穫の一つである。今測らずも博士の長逝に逢ひ、本誌編輯同人は私に囑するに追悼論文の起草を以つてしたが、博士の命に依りて私の現に専念しつつある繁忙事は到底微力なる私にその餘暇を興へず、未熟なる舊稿を掲げてその責をふさがざるを得ざるは遺憾である。

目次

一、開題

社會哲學の基本問題

二、社會概念と個人概念

三、『價值社會』と人格

四、價値の體系

五、結論・『人格價値』と『人格文化』

—

社會哲學そのものが果して、他の諸哲學より獨立せる一個の範域と方法とを有するや否やは、實のところ未定の問題である。固より經濟哲學が經濟學の學的根據を研覈する爲めに存在すると云ふが如く、社會科學批判としての社會哲學は存立し得るであらう。然しながら、一切の社會問題の歸着點を明かにし、社會思想の批判者となり基準となるの社會哲學、云はゞ社會の理想に關する形而上學は社會科學批判としての社會哲學以外に、別個の意義と重要とを有しなければならぬ。従つて此の意味に於ける社會哲學の問題を釋ね、之れを明かにすることは、社會問題を研究し社會思想を論ずるもの、皆一齊に、其の研覈の努力を注ぐべき根本的の課題であると思ふ。

然らば斯くの如き意味に於ける社會哲學の基本問題は何であるか。余は之れに答へて、そは社會對個人の問題に他ならないと主張したい。固より社會對個人の問題が社會科學の出發點であること

は既に屢々稱へられたところである。例へばジムメルは社會對個人の問題を以て社會學の基本問題とし⁽¹⁾、左右田博士は社會と個人との概念と意味とを以て吾が經濟學の出發點であるとし⁽²⁾、スチール・ソムロ⁽³⁾は政治學の、而してゲオルヒ・メーリス⁽⁴⁾は倫理學の基本問題を形成すると云つてゐる。余はまた別個の意味に於て社會對個人の問題は、茲處に所謂社會哲學のグランドテーマであると考へるのである。

- (1) Georg Simmel, Grundfragen der Soziologie, Sammlung Götschen, 1920.
- (2) Kichiro Soda, Geld und Wert, Tübingen 1909, S. 59.
- (3) Stier-Somlo, Grund- und Zukunftsfragen deutscher Politik.
- (4) Georg Mehlis, Probleme der Ethik, Tübingen 1918, Vorwort, S. V.

社會は個人を離れて獨立の存在を有するものなるか、或はまた個人以外に何等客觀的なる存在を有せざるものなるか。是れ既に一個の重要な問題である。例へばリツケルトの門弟にして克く其の歴史哲學を大成したるメーリスは、社會對個人の問題を取扱ふに當つて些の疑をも懐くことなく、社會と個人との概念上の區別を前提とし、直ちに社會は個人の爲めに存在するものなるか、或はまた反對に、個人は社會の爲めに存在するものなるかを問はんとし⁽¹⁾、京都の西田博士は絶對的自由意思の立場から、個人的意識の根柢に一種の社會組織を考へ、斯くして社會と個人との間には

何等客觀的有價值的なる區別なしと論ぜらるゝ(2)。

(1) G. Mehlis, „Die Beziehung zwischen Einzelmensch u. Gemeinschaft“ (Logos, 1922, Bd. XI, Heft 1)

(2) 西田幾太郎稿、社會と個人(哲學研究大正十一年四月第七十三號)(大正十二年刊『藝術と道德』に收む)

固より吾等は社會が單に多くの個人の集團たるが故に價值を生ずると云ふのでもなく、また心理的個人が直ちに有價值的なる社會の基礎となるとの説に満足するものでもない。さりながら一面、社會對個人の關係を以て一切の社會哲學の基本問題とするの前に、更に其の根本に遡りて、社會と個人との概念を考究するの必要を感じ、而して他面、絶對的自由意思若しくは唯心論的形而上學に最後の安靜點を求め得ずして、個人のほかに何等かの意味に於ける有價值的なる社會を想定せざるを得ない吾等は、先づ社會と個人とが概念上如何なる決定と區別とを受くべきやを問はなければならぬ。之れが本篇に於ける第一の問題であり、而して又、第二の問題へのフオアアルバイトたるものである。

然らば斯くの如き概念的の規定と區別とを受けたる社會と個人とは如何に交渉し、また調和すべきか。換言すれば個人と群衆、個人と團體、否な一般に社會との關係は如何に解すべきか。之れが本篇に於ける第二の、而してまた終局の問題である。實際上之れに關聯して吾等に其の解決を迫り

來たるべき事實問題は決して一二にとゞまらない。否な一切の社會問題は究極の解明を茲處に求むべきである(1)。

(1) 左右田喜一郎著、文化價值と極限概念、大正十一年刊、五〇頁參照

例へば社會の利益と個人の利益とは如何にして一致すべきやの問題は其の一である。固より絶對的自由意思の立場よりする西田博士の如く(1)、社會と個人との間に何等客觀的・有價值的なる區別なしと考ふることを許さず、従つて又、自己を愛することが他を愛することであり、他を愛することが自己を愛することであるとの論構に満足し得ない吾等は、必然的に此の問題に逢着せざるを得ないのである。然しながら既に一度ピカントの洗禮を受けたる吾等は、最早や此の間の矛盾を去り調和を立つるに於て、神よりの豫定調和を説くライブニツツ、乃至は個人的利益の追求の結果は自然的に或は寧ろ必然的に社會の利益に合致すべしと説くアダム・スミス(2)に、多大の敬意を表しつゝ、も猶ほ吾等の學的・理論的の要求を満足せしめ得べくもない。然らば吾等は社會の利益と個人の利益とが、永久に合致することなき二個の平行線と觀ずるに於て、唯物論史の著者として、また現代に於ける獨逸マルブルヒ學派の發生を促したる社會思想家として著名なるエフ・ア・ランゲと共に、『偉大なる社會的理想の下にエゴイズムを屈服せしめ、社會生活に於ける人間の完成を新し

き目標として、單に個人的なる利益を追求する小息みなき努力に代ふるにあらずんば、新しき時代は到底凱歌を奏せぬであらう』⁽³⁾と嘆ずべきか。或はまた社會的目的論の立場より、二個の平行線の無限の延長に於ける一致を想ふに於て、吾が左右田博士と共に、社會と個人とは寧ろ自己目的其れ自からとしての人類に考ふべき二個の方面であるとし⁽⁴⁾、此の兩者が據つて以て係はらしめらるるところの文化價值並に創造者價值の相互間に於ける認識論的關係に基づいて各般の社會問題は究極的に解明され得べきもの、而して又されざるべからざるものと主張すべきか⁽⁵⁾。或はまた二個の直線的進展とは見ることなく、云はゞ積極・消極の兩極よりする集中的、若しくは螺旋的の發展と考ふるに於て、吾等はマールブルヒ學派の大成者たるパウル・ナトルプと共に、社會と個人とを背反的なる對立と考ふることなく、常に一個の、而して永遠に成生の過程を追うて止まざるところのイデーとし、此の社會の究極的なる理想的中心點は正に『神』と解せらべきものと觀すべきか⁽⁶⁾。蓋し吾等の沈思熟考を重ねべき問題でなければならぬ。

(1) 西田幾太郎、前掲論文(哲學研究七十三號)・三九一頁

(2) A. Smith, *Wealth of Nations*, Meunloch's ed., p. 352.

(3) F. A. Lange, *Die Geschichte des Materialismus und Kritik seiner Bedeutung in der Gegenwart*, Leipzig 1908, Bd. II, S. 562.

(4) 左右田喜一郎稿、テレオロギー考察（思想、大正十二年一月號）八〇頁

(5) 左右田喜一郎著、文化價值と極限概念、大正十一年刊一五〇頁

(6) Paul Natorp, Individuum und Gemeinschaft, Jena 1921, SS. 5—6.

また個人間の、乃至は社會への個人の服従犠牲は之れを如何に解すべきやの問題は其の二である。近時社會奉仕なる語の流行に連れて、第二十世紀の理想を以て個人の社會的貢獻に在りとし、京都の財部博士は、社會奉仕を義務と觀する以上に報恩と觀ぜしめ、『身のために君を思ふは二た心、君のためにぞ身をば忘れて』とうたへる大楠公の詠の如く、常に軍律に強ひらるゝが爲めのみならず、自憤克く君の爲め、國の爲め、社會の爲め身を忘るゝの途を知るべしとて、社會奉仕・自己犠牲を論ぜらるゝ⁽¹⁾。さりながら既にカントの人格主義の道德を學び、更に文化價值實現の過程として何人と雖も各々特殊の地位を與へらるべしとする所謂文化主義の立場より、其中の人格の或るものに對する絶對の服従、絶對の犠牲を要求するの先天的理由あり得ざることを左右田博士⁽²⁾に依り教へられたる吾等は、斯くの如き無意義なる、而してまた何等の學的根據を有せざる個人間の、乃至は社會への服従・犠牲の教へに満足し得べくもない。愛と犠牲と服従との教を説き、『人の友のために己の命を捐つるは之より大なる愛はなし』⁽³⁾と教へた基督でさへも、高き香膏を基督の足に注げるマリアを見て、此の香膏を何ぞ銀三百に賣りて貧しき者に施さざるや、と云へるイ

スカリオテのユダの詰問に對して、『彼に與^かはる勿れ、我が葬りの日のために之を貯へたり。貧しき者は常に汝等と共にあれど我は常に汝等と共に在らず』⁽⁴⁾と苦しい答辯をなしたてはないか。吾等は基督の言葉にも平等思想の半面を窺ひ、茲處に價值哲學的の意味をすら認め得るのである。然るに人格の價值を尊重するの餘り、偉大なる一個の人格の爲めには多數者を犠牲にすることをすらは認し、斯くて貴族主義的なるニイチエの道德にも相當の理由を認めむとする人（西田博士）⁽⁵⁾あるに於て、且つは左右田博士が、各人が此の世に生き得べき唯一の存在理由として或る價值實現の過程として、凡ての人格は其の各々の處を占め得べきものであり、或る超越的價值に對するものとして、各人格は代置し得べからざる其れ自身固有の地位と重要とを有するものとして見らるべきものである⁽⁶⁾と説かれながら、『價值の體系』に於ては所謂る創造者價值の尊嚴を高調し、茲處に個人の意義は盡く⁽⁷⁾と論ぜらるゝに於て、價值の創造に參與し得ざる家庭に於ける妻の地位、四十年間稀代の學的天才に仕侍したる名もなき一ランペ、其の他多くの非創造的なる、否な、他に服従し仕侍することに依りて天才をして天才たらしめ、創造者をして創造者たらしめつゝあるところの無數の群衆の、存在の理由と歴史的の意味とは、之れを如何に解すべきか。余は心竊かに之れを疑ひ、而して自から社會思想の批判者たり基準たりと稱へつゝある文化主義（左右田博士）の到底一個の

貴族主義に墮し終るなきやを思はざるを得ないのである。斯くして服従と犠牲とは余にとつては解決を急ぐべき甚だ重要な問題に他ならぬのである。

- (1) 財部静治稿、個人と團體との關係（經濟論叢大正十二年一月號）參照
- (2) 左右田喜一郎著、文化價值と極限概念、大正十一年刊、一三一—一四頁
- (3) 約翰傳第十五章第十三節
- (4) 約翰傳第十二章第五—八節
- (5) 西田幾太郎、前掲論文、二二頁參照
- (6) 左右田喜一郎、三前掲書、一〇—一二頁
- (7) 同上、一七〇頁

更に又、人格の自由又は個性の創造と社會との關係は如何に解すべきやの問題は其の三である。

此の問題も亦た前二個の事實問題と關聯して、其の究極的解釋の分るゝは、一に社會と個人との概念と意味とを如何に解すべきやに因つて然るものである。社會は個人の爲めに存在すると云ふニイチエにとつては、大衆の文化、否な一般に社會の價值は否定せられ、個人の自由のみ高調せらるゝであらう。然るに個人を以て有機體たる社會の一員とし、個人は社會の爲めにのみ存在すと説くコムトにとつては、個人の自由、個性の創造は否定せられざるを得ないであらう(1)。近くはルウツオの思想を享けて、ギルド社會主義の基礎付けを企てつゝあるジイ・デイ・エツチ・コールは先づ自由

を二種別し、一は純粹の個人に屬するもの、他は個人が其の成員たるところの諸種の社會に屬するもの、即ち、云はゞ前者は本來の個人的自由であり、後者は社會的自由であるとし、其の何れもが社會に於ける機能的民主主義の組織に依つて、內的にまた外的に、自由に發現せらるゝことを得べく、而して社會は斯くの如き機能的組織に基づきて構成せらるべきもの、結局社會は個人あるによりて存立し、而かも個人の爲めに、詳言すれば社會は目的そのものとしてゞなく、單に個人の自由の爲めの手段としてのみ存在するものなるが故に、其れを構成するところの個人の意思を超越し得べからずと説くのである⁽²⁾。然しながら斯くの如き思想はコーエンに於ける所謂^{メテバイト}多性の判斷にとどまりて、未だ全く全性^{フルバイト}の判斷を解し得ざるものなりとの論難⁽³⁾に俟つまでもなく、それが純然たる經驗論に立脚して、經驗的個性又は心理學的個人の集合が直ちに社會を形成するもの⁽⁴⁾と考ふる點に於て、吾等は批判主義的價值哲學の立場より之れを批難せざるを得ない。本問題に關しては、余は寧ろウキンデルバンド⁽⁴⁾リツケルト⁽⁵⁾等と共に、社會を超人格的なるもの、個別的主觀を超えて存立するものと解するに於て、愈々其の究明の切要なるを感じるのである。殊に他に超出したる偉大なる個性、天才と社會とが如何にして調和すべきやは本問に關聯して考ふべき重要なる問題である。

- (1) G. Mehlis, „Die Beziehung u. s. w.“ Logos, 1922, Bd. XI, Heft 1, SS. 31—34.
- (2) G. D. H. Cole, Social Theory, 1921, 2nd ed, pp. 180—192.
- (3) 土田杏村著、文化主義原論、大正十年刊、四四〇—四四五頁参照
- (4) Windelband, Einleitung in die Philosophie, 2. Aufl., Tübingen 1920, S. 345.
- (5) H. Rickert, System der Philosophie, Bd. 1, Tübingen 1921, S. 98.

其の他數へ來らば吾等の解明を俟つ問題は多々あるであらう。而かも余の信ずる處にして過ちなくんば、其の究極の解釋は結局、社會對個人の問題に歸するのである。近世、殊に十八世紀以降、『社會』が問題の中心點となり、他面、現代の哲學に於て『個性』が問題の核心を形成するに於て、社會對個人の問題は愈々其の重要な度を加ふるに至つた。ナトルプが彼れ自から告白せるが如く⁽¹⁾、社會對個人の問題は單に哲學に始まるものにあらずして日常生活に附着し、斯くして彼れが從來發表せる著書、論文、並に日々參與しつゝあるところの民衆及び個人の教養、學校問題、青年運動等の意義も要するに此の問題に他ならなかつたのである。斯くて社會對個人の問題は啻に社會科學の出發點たるのみならず、實に社會問題の歸着點を示し、社會思想の批判者たり基準たる吾が社會哲學の出發點であり、同時に其の基本問題でなければならぬ。社會哲學は茲處に其の固有獨自の問題を得て、自からの體系を樹立し、斯くして、社會問題の解決に従ひつゝも未だ哲學を有せず

と歎じつゝある社會政策(2)に哲學的根據を與へ得るであらう。

(1) P. Natorp, Individuum und Gemeinschaft, Jena 1921, S. 5.

(2) 福田徳三著、社會政策と階級鬭争大正十一年刊、三六頁參照

二

社會と個人とが如何なる關係に立つやの問題を考察するに際しては、吾等は先づ其のフォアアルバイトとして、社會と個人とが如何なる概念上の決定と區別とを受くべきやを考究しなければならぬ。社會問題の中心となれる『社會』が謂はゆる近世に於ける發見(1)にかゝるものなりとするも、既に希臘の昔アリストテレスが『人間は社會的動物なり、生れながらにして社會を造る』と道破して以來此の問題は、幾多優れたる思想家の頭腦を支配せずには已まなかつた。而かも其の結果は唯だ、此の問題の困難なるを一層痛切に感ぜしむるに過ぎなかつたのである(2)。例へば福田博士は社會を以て規定し得べからざるもの、即ち『無限に擴大し行く Etwas undefinirbares』(3)であるとし、また皮相なる多くの社會觀察者は社會を以て二人若くは其れ以上のものゝ結合なりと定義する。而かも吾等は社會を斯く解するに於ては、論者自から社會現象を正當に解釋し得たりと信じつ

つあるに拘はらず、不幸にも其の所説から何物をも學び得ないのである(4)。然らば吾等は社會(Gesellschaft)を以て、従つてまた個人(Individuum)を以て、如何なるものと解すべきか。

(1) 福田徳三著、社會政策と階級鬭争、大正十一年刊、第一章參照

(2) Soda, Geld und Wert, Tübingen 1909, S. 54.

(3) 福田徳三、前掲書、五五頁

(4) Soda, a. a. O., S. 55.

社會と個人との概念と意味とを考究するに當つて、先づ吾等の視野に入り來たるべきものはアウギユスト・コムト(1)である。コムトに従へば社會は一個の有機體(Organismus)であり、個人は其れを組織する一個の細胞である。従つて縦しんば其の社會に、他に超出したる人格ありとするも、それは社會の一枝體(ein Glied)又は道具として引下げらるゝ。云はゞ個人は種々なる働作の中樞に他ならない。個人は社會的相制作用の所産であり、其れ自からは何ものをも齎らし得ず、また其れ自からは何の意味をも有し得ない。個人は社會の所産であると同時に、其の時代の所産でもある。斯くしてコムトは愛他主義、同情と愛とを力説し、社會への融合と歸入とを慫慂する。人格は社會の一機關であつて其れ以上のものではなく、また個人生活は社會に無條件に奉仕するべきものである。従つてコムトによれば、特に愛他的本能の發展しつゝあるものと見らるべき婦人とプロレタリ

アとは、將來必らず優支配的地位を占むるに至るべしとの結論⁽²⁾となるのである。然しながら若しも斯くの如き説が正しいとするならば、吾等は如何にして天才と英雄、聖者と豫言者との、意味と重要とを解し得るであらうか。若しも個人が社會と時代との所産に他ならないならば吾等は如何にして、社會革命家の偉大なる事業と人格の意味とを認め得るであらうか。コムトの所説が生物學的の比論(Analogie)に基づき、従つて自然科學的概念構成にとゞまるものなるに於ては、歴史生活の認識興味より、固有のもの、獨自のもの、特性的なるものを尊重せむとする吾等を、到底満足せしめ能はざるべきは云ふまでもなく、如何に彼れが社會への個人の融合と歸入と奉仕とを尊重することに依つて婦人とプロレタリアとの文化の成生を豫想するにしても、夢よりも淡き望みを彼等に抱かしむるのほか、何等の光明をも現代の社會問題に與へ得ないであらう⁽³⁾。

(1) A. Comte, Soziologie, deutsche Uebersetzung, Bde. 3, 2. Aufl. Jena 1923.

(2) Mehlis, Die Beziehung (Logos, Bd. XI, Heft 1) SS. 31—32. 參照

(3) メーリスは自然科學的概念構成が社會問題を満足せしめ得ない所以を論じて次の如く云つてゐる。

„Dem Leben selber ist der Begriff des naturwissenschaftlichen Gesetzes, vollkommen fremd. Und die naturwissenschaftliche Begriffsbildung ist ausserstande, dem sozialen Problem zu genügen, zumal es hier nicht nur auf begriffliche Erfahrung, sondern auch auf die ganz andere geistige Form des Verstehens ankommt.“ (Ibid., S. 36)

ユムトの自然科学的社會觀を離れて、一步を吾が歴史科學に進めむと試みたるは、ジムメル(1)とシユタムラー(2)である。ジムメルは社會の意味を論ずるにあたつて、先づ個人の意味より始め、個人は一の統一(Einheit)であり、多様な要素の總額(Summe)であり所産(Produkt)であり、而して生物學的に之れを組織するところの諸部分は各々獨立せる存在を有するものと觀じ、而かも斯くの如き有機的統一體としての基礎を部分間の相合作用(Wechselwirkung)に置かむとする。斯くしてジムメルは社會の統一をも、其の之れを組織する部分間の相合作用を以て説明せむとするのである(3)。然るにシユタムラーはジムメルの所説を以て未だ全く自然科学的觀察より離脱し得ざるものとし、専ら形式的方面より社會概念を規定しようとする。即ちシユタムラーに依れば、社會生活はジムメルに於けるが如き個人間に内的に發出するところの相合作用に依るにあらずして、寧ろ、外的に規定された人間の共同生活である(4)。ジムメルに於ける中心思想が個人間の相合作用に在るに反して、シユタムラーのそれは外的規定(aeusserere Regelung)に在るのである。さりながら吾等は左右田博士と共に(5)、一方ジムメルに關しては、個人間に於ける相合作用を基として社會概念を決定すべしとするに於ては、先づ第一に個人なるものが其れ自から完結せる一個の統一體として考察さるゝことを要し、従つて個人概念は既に論理的に社會概念を前提とし、斯くして社會を前提する

ことなくしては、統一體としての個人、社會の出發點としての個人を到底思惟し得べからざるものなりとの意に於て、而して他方シユタムラーに關しては、却つてジムメルが之れに論駁を加へたる如く(6)、其の所謂る外的規定が單に諸部分の相制作用の所産たるに過ぎず、而かも斯くの如き外的規定が內的に發出するものにあらずとするに於ては、既に個人以外に存在するところの一主體、即ち社會の存在を前提とし、斯くして彼れも亦た社會概念の決定にあつて一個の論理的誤謬に陥り、また左右田博士の評されたるが如く(7)、個人間の相制作用と、外的に規定されたる形式を有する人間の共同生活とは明かに二個の異なりたる言表であり、従つて嚴密なる論理的吟味を以てすれば、彼れが全然異なれる結論に達し得ると主張せるに拘はらず、其の内容に立ち入つて考察すれば何等異なるものにあらずとの意に於て、到底吾等の論理的要求を満足せしめ能はずと云はざるを得ないのである。

- (1) Simmel, Ueber sociale Differenzierung, 2. Aufl. Leipzig 1905; Soziologie, Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, 3. Aufl. Leipzig 1923.
- (2) Stammer, Recht und Wirtschaft, nach der materialistischen Geschichtsauffassung: Eine sozialphilosophische Untersuchung, 3. Aufl. Leipzig 1914.
- (3) Soda, Geld und Wert, Tübingen 1909, SS. 59—61. 參照

- (4) Ibid., SS. 66—67.
- (5) Ibid., SS. 63—65.
- (6) Ibid., S. 68.
- (7) Ibid., SS. 68—71.

ジムメルを経、シュタムラーを一瞥したる吾等は、固より社會を以て個人以外に獨立せる一個の存在と見るの冒險を敢てしてはならぬ。然るにヴント並に今日多くの謂はゆる社會心理學者は個人現象以外に獨立せる、而してまた全く本質的に異なるところの社會現象の存在を認め⁽¹⁾、之れを以て、個人心又は個人意識に對立すべき、社會心又は社會意識と考ふるのである⁽²⁾。然しながら吾等は、縦しんば社會に個人の心理若しくは意識に類似したる處ありとするも、如何にして、個人以外に獨立せる社會の心理若しくは意識ありと考ふるを得べきか。嘗つてジイ・デイ・エツチ・コールが社會學上の比論アナロジーを論難したる如く⁽³⁾、社會に心あり意識ありと考ふるは、物理學上の比論を以て一種の機構 (Mechanismus) と解し、又は生物學上の比論を以て一種の有機體 (Organismus) と見るものと共に、結局、社會そのものに關しては何ものをも説明し得ざるものにはあらざるか。斯くして又吾等は、法律上の概念としては兎に角も、社會的共同生活を以て一個の獨立人格と見るの説⁽⁴⁾に對しても同様の疑問を抱かざるを得ないのである。

- (1) Soda, Geld und Wert, Tübingen 1909, S. 71. 參照
- (2) 元良勇次郎稿、個人意識と社會意識(哲學雜誌、明治四十四年二月號) 參照
- (3) Cole, Social Theory, 2nd ed. London 1921, pp. 13—16. 參照
- (4) 福田徳三、前掲書、六六頁及び一三九頁參照

社會を以て個人以外に獨立せる一個の存在と思ふに反し、而してまたコムトに於けるが如く個人を以て社會の爲めに存在するものなりと考ふるに反し、茲處に、存在するものは個人であり、社會は個人の爲めに存在すと説くものがある。ギルツメンの一團即ち是れである。彼等の解する處に據れば、本質的なる社會價值は人間價值に他ならず、社會は其の成員の意思に依りて支持されたる諸結社の一複合體にして、其の成員の幸福を以て社會の目標とすべきものなるが故に、政治上に於ても經濟上に於ても、各人が均等なる權利主張の機會を有するに於てのみ其の社會は健全なりと云ひ得るのである⁽¹⁾。従つて彼等の懐ける思想の骨子は、社會は其の成員の爲めに、個人的並に社會的の自己表現に對して可能的最大の機會を與へ得る如く組織せらるゝことを要すと云ふにある⁽²⁾。斯くしてギルツメンによれば、社會は個人より、且つ個人の爲めに存在する。従つて社會はそれを構成するところの成員の意思を超越することは決してあり得ないのである⁽³⁾。心理發生的 (psychogenetisch) に考察すれば、固より社會は個人の意思と行爲との單なる集合と解せられ、また個人は

個人として何等かの意義ありと云ひ得るであらう。然しながら斯く解するに於ては、まさしくモリスの云へるが如く(4)、社會は何等の規範を有せず、個人は何等の價值をも有し得ないであらう。また『個人そのまゝの禮讚は畢竟、社會の存在を否定するところの虛無主義に導び』(5)かざれば已まぬであらう。茲に於て、キスチアコヴスキーがルウソオの集合意思説に對して鋭き論難を加へたる如く(6)、吾等はギルツメンに對して、社會概念は到底個別的なる意思の集合より把握し得べからざること、従つてまた個人が有價值的なるものたり得むが爲めには、其の究極に於て儼として目標たり、規範たる、超個的・普遍的なる文化價值の必然的に照應すべきものなること(7)、従つて之れなくしては到底一介の自然人(Naturrensch)たるにとゞまり、有價值的なる文化人(Kultur-mensch)たり得べからざること、を強く主張しなければならぬ。左右田博士の比喻を藉りて云へば、點と線との關係に於て線概念の成立する時は既に、點概念の獨立を失へる時である。如何に多くの點を附加するに於ても吾等は到底線概念に到達し得ないであらう(8)。此の意味に於て余はコレクティブイズムスの認識論的破綻は遂に免がれ得ざるべしと思ふのである。

(1) Cole, Guild Socialism, re-stated, London 1920, p. 12.

(2) Ibid, p. 13.

- (3) Cole, Social Theory, 2nd ed. London 1921, p. 192.
- (4) Mehlis, Probleme der Ethik, Tübingen 1918, S. 84.
- (5) do, Lehrbuch der Geschichtsphilosophie, Berlin 1915, S. 300.
- (6) Kistakowski, Gesellschaft und Einzelwesen, Berlin 1899.
- 土田杏村編著、文化、第一卷二五—二六頁參照
- (7) 左右田喜一郎著、文化價值と極限概念、大正十一年刊、六〇頁
- (8) Soda, Geld und Wert, Tübingen 1909, SS. 82—83.

存在するものは個人であり、社會は唯だ個人の爲めにのみ存在すと云ふに於て吾等が茲處に看過すべからざるはニイチエである。ニイチエは偉大なる個性、超出したる人格を高調する。社會は高き個人の爲めに存在し、一の文化の美しさ、及び偉大さは、其の平均水準者を以てしては示されない。そは却つて一の個人の自己充足的行動に依つてのみ測られ得る。例へばルネサンス時代が其の意義を有し得るはミケランゼロとリオナルドオとの存在せるが故である。斯くしてニイチエによれば過剩者、大數者、並に平均水準者の、世に存在し得べき領域は無い。蓋しこれ等のものは文化の増大の爲めには特に役立つものではなく、却つて夫々の昇昂なる文化の發展にとつては有害なる重荷となり、文化の底荷(Kulturballast)を意味するに他ならざるが故である。ニイチエの社會哲學的認識は要するに、偉大なる個性、超出したる人格は如何にしても社會の所産、時代の所産とは考

へ得べからずして、一民族の所謂『精神的相貌』 „geistige Physiognomie“ は原則として少数者に依つてのみ決定せらるゝと云ふに在る⁽¹⁾。吾等は今、ニイチエから、超出したる個性の尊嚴を學び得た。而してまた吾等は現代の思想界に於て彼れが猶ほ如何なる地位を有し居るやを知つてゐる。而かも彼れの思想は、天才を嘆美し、超人を謳歌するのほかに、抑も如何なる社會哲學上の意味を有し得べきであらうか。固より社會は天才に導かれ、大衆は超人に隨ふであらう。さりながら社會を離れ、大衆を別にして天才と超人とは克く其の天賦を發揮し、個性を完成し得るであらうか。否な偉大なる藝術家の背後に隠れたる内助者のあることを思ふ時、稀代の天才に尊き生涯の大半を捧げたる、名もなき一ランペのあるを思ふ時、余は有害なる重荷と見られ、文化の底荷とせらるゝ水準者の、埋没に委ね難き歴史的の意味と重要とを心竊かに想はざるを得ない。余は今、ドストイエフスキーが嘗つて民衆を稱揚して、『偉大なるものは汝によりてなされた。汝こそは我が神である』と云つた懺悔録の言葉を胸に浮べつゝある。船舶に於ける過剰者の滿載は其の速度を弱めるであらう。然しながら、適度なるバラストは其の航行に缺くべからざるものであり、其の積載は却つて船足を強めるであらう。

(1) Mehlis, Die Beziehung u. s. w. (Logos, 1922, Bd. XI, Heft I) SS. 31—34.

今や吾等は本章に於ける最後の考察に急がねばならぬ。乃ち吾が左右田博士は、社會概念と個人概念とを如何に解し、如何なる決定を與へらるゝであらうか。博士によれば(1)一の個體が一定の意味、特定の範域に於て獨立性を保有し得る限りに於ては、個體以外に於ける特定の抽象的なる統一體を案出することは、單に無用の企てなるのみならず、却つてまた嚴密なる學理的理論を破壊に導びくものである。一の個體が一定の意味と範域とに於て其の獨立的存在を失ふところに於て始めて、一個の認識對象、即ち個體より出でゝ而かも個體に屬せざるところの、而かも個體を離れて概念的獨立性を保有するところの認識對象が現はれ得るのである。國家が一個の社會なりとの主張も、此の意に理解さるゝ時に始めて一個の意義を有するに至るのである。各細胞が一定の意味に於ける獨立性を失ふ時に始めて個體なる概念が生じ、而して個體なる概念は其の構成體から獨立せるところの一個の認識對象となるのである。概念的にも時間的にも、一者が存立すると同時に他者が其の獨立的存在を失ふに至る。個體なる概念が生ずると同時に、細胞なる概念は最早や其の獨立性を有せざるに至る。第一概念が其の獨立性を保有する限りは、それより獨立せる第二概念は存立し得ないのである。今二三の例に就いて見るに、個々の點と線との關係に於て、個々の點が完全なる意義に於ける概念的獨自性を保有する限りに於ては線概念は存立し得ない。點が一定の意味に於け

る獨自性を失ふものと考へらるゝ場合に於て始めて、それと同時に線なる概念が成立するに至る。線概念が其の固有の意味を失ふに於て點概念は、線から獨立せる意味を有することゝなり、斯くて線からは獨立せる、一個の認識對象となり得るのである。更にまた個々の星と星體との關係、個々の音と調和せる音調との關係に於ても同様である。一者が認められ感知せらるゝ限りに於ては吾等は他者を有し得ざるべく、之れに反し、後者が存立する場合に於ては前者は其の固有の概念的獨自性を失ふに至るのである。完全なる意味に於ける個體が其の獨自性を失ひ、而かも到る處に社會が顯現すると見る場合は既に形而上學に屬する。然しながら個體をば單に認識の主體と考へ、其の獨自性を失ふに至るところの、社會に對する其の地位を考ふるならば、個體は常に必ず一定の範域及び特定の意味に於て考察せらるべきものにして、決して同時に、到る處に結合するものと考察さるべきものではないのである。慈處に於て次の如く主張し得る。即ち個體をば一定の意味、一定の範域に於て存在するものとして、而かも亦た其の概念的獨立性を失へるところの個體として考察し得る場合に於ては、概念的にも時間的にも、それと同時に全體なる概念が生じ、而して概念的に獨立しむる個體は其の部分として包含さるゝに至る。而して博士に據れば此の全體概念こそ『社會』„Gesellschaft“と名づけらるゝものなのである。

(1) Soda, Geld und Wert, Tübingen 1909, SS. 82—84.

然らば斯く解せられたる社會概念は、全體に對する部分としての個人概念とは如何なる關係に立つべきか。博士に據れば(1)、全體概念として思惟せられたる社會概念の性質上、そは個人に自存的意味を與へないならば推論し得べからざるものである。此の意味に於て社會概念と個人概念とは二個の獨立自存の概念である。若しも一者の獨立自存を前提とするならば、斯くて又、他者の獨立自存も生じ來たるべきである。多くの論者の云ふが如く一は決して他の上層概念(Oberbegriff)でもなく、また類概念(Gattungsbegriff)でもなく。兩者は嚴密に學的に、同一の根基の上に資格付けられて、互に對立すべきものである。此の意味に於ける社會の存立及び變化の過程を解明することが社會科學の任務であるならば、個人も亦た自然科學的意義を離れて、社會に於けると同一の仕方にて平行的に取扱はるゝことを要する。蓋し個人に自存的意味を賦與することなくして社會の意味を解明せむとするは、何等の意義をも有せざるべきが故である。さりながら右述ぶるが如く、社會と個人との兩概念が社會科學に於ては互に獨立的なるものとして平行的に取扱はるべきものであると云ふは、博士に據れば、決して兩者が概念的にも本源的にも全然無關係であると云ふの意ではない。否な全然之れとは反對に、一概念は他概念との密接なる關係なくして存立し得べしとは一般に考へ

得べからざることなり、と主張するに在る。社會概念も個人概念も互に分離しては何等の意義をも有し得ない。凡そ全體概念と部分概念とは常に對等の地位を占むる。斯く解するに於て社會概念と個人概念とは、概念的にも時間的にも、互に對立するものとして、且つ概念上相互に獨立するものとして、吾等の意識に明かとなるのである。斯くして博士に據れば兩者は二個の、同時存立的・相互並立的・自己制約的なる相關概念(Korrelatbegriff)であるのである。

(1) Soda, Geld und Wert, Tübingen 1909, Ss. 85—86.

社會と個人とを斯く相關概念と解するに於て、慈處に吾等が一切の論理的思惟は盡き、認識論上の問題として見たる社會對個人の關係は、慈處に其の究極の解明を得べきである。然らば吾等は慈處に、何を考ふべきであるか。

三

概念上の問題として見れば社會と個人とは之れを相關概念と見る以外に殆んど一步をも出で能はざるべきことは吾等が前章に於て考察したるところである。さりながら、一面に於てはウキンデルバンドの云へるが如く(1)、一切の人間は個人であり得るも一切の個人は人格とは云ひ得べからず、

またリツケルトが個體 (Individuum) と個性 (Individualität) とを峻別して云へるが如く(2)、歴史的
文化科學は一切の個體を叙述し得るのでなく、唯だ一の普遍的價值に關して本質的なるものだけを
叙述し得るものなるに於て、而して他面、メーリスが云へるが如く(3)、單なる個人の總額たる群團
(Herdengemeinschaft) が有價值的なる社會を形成し得ざるものなるに於て、吾等はメーリスが謂ふ
ところの『人格の特有價值を解し得ざる全體對部分の量的概念』(4) を去りて、茲に必然的に、有價
值的なる個性と社會との問題に移らねばならない。

- (1) Windelband, Einleitung in die Philosophie, 2. Aufl., Tübingen 1920, S.338.
- (2) Rickert, Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 3. u. 4. Aufl., Tübingen 1921, S. 358.
- (3) Mehlis, Probleme der Ethik, Tübingen 1918, S. 86.
- (4) do., Lehrbuch der Geschichtsphilosophie, Berlin 1915, S. 302.

人生を價值生活の過程と解することによりて、茲處に歴史の意味を知り、人生の悠久を悟り得べ
しとするならば、ゾレンに對立し、而かも之れによりて改變せられ意味あらしめらるべきザインと
しての生活は、固より政治に經濟に、科學に藝術に、哲學に宗教に、向ふところは夫々多様なる分
野なるに拘はらず、而かも之れを一の個性、一の人格に統一するものなるに於て、之れを純真なる
意味に於ける『倫理生活』——若干生硬なる用語に訴ふれば『反價值克服の生活』„Das Leben der

„Gegenwertüberwindung“ 又は『個性構成の生活』„Das Leben der Individualitätsbildung“——と名づけ得ぬであらうか。有價值的なる社會を構成し、それとの交渉に於て個人の生活が維持せられ、またウキンデルバンドの云へるが如く、『個人が單なる一個の、類の見本 (Gattungsexemplar) 以上の意味をもつべきものと觀するに於て、こゝに人格の本質が存在する』⁽¹⁾と見るならば、個人は一切の社會生活に關與するの前に先づ善價値に導かれ、且つ自から義務を意識するところの倫理的個性となり、凡ての價値生活をそれ自身綜統する一人格となることを要せぬであらうか。人と人との交渉あり關係のあるところ、否な孤獨なる隱者の生活に於てさへ、吾等は倫理的個性構成の原理を認め得ぬであらうか。否な斯く解するによりてのみ吾等は、反社會的なる革命家、郷土を逐はるゝ豫言者にも、倫理的價値と人格的意味とを要求し得るのである。

(1) Windelband, a. a. O., S. 341.

倫理的價値は嚴密なる意味に於ては科學・法律・經濟に於けると同様に『社會的なるもの』„das Soziale“を本質生命とするところの夫々の構成體に屬すべきものである。而かも吾等は倫理生活に於ては、自己に對する義務と他に對する義務とを區別し得ることに依つて一方には個人倫理 (Individualethik) を、而して他方には社會倫理 (Sozialethik) を立し得るのである。而して吾等は茲

處に、善意思に導かるゝところの個人をメーリスと共に『倫理的個性』, *ethische Individualität* (1) と名づけ、又は歴史的意味に於て之れを『價值個性』, *Wertindividualität* (2) と呼び、而して斯かる個人によりて構成せらるゝ社會を『價值社會』, *soziale Wertgemeinschaft* 又は『文化社會』, *Kulturgemeinschaft* (3) と稱せむと欲する。

(1) Mehlis, Probleme der Ethik, Tübingen 1918, S. 9.

(2) Ibid., S. 84.

(3) Ibid., SS. 86—87.

凡そ個人は社會に義務を負ふと同時に、彼れ自から價值個性を構成せむが爲めに義務を有する。個人は此の特殊なる任務を、社會に奉仕することに依つて忽にしてはならない。餘りに多く他のものに従ふことに依つて自からの個性構成を妨げらるゝならば、一時自己に歸るは此の意味に於て非難さるべきことではない。リツケルトも人格の自律を高調して『吾等は事情に依つては社會の慣習に反し、個人主義的に己れを保護するであらう。否な、吾等は吾等の自律を其の慣習に依つて脅かす社會を決して倫理的社會とは稱せぬであらう。人格の自律としての自由は何處に於ても倫理的尺度である。唯だ服従の一定の度合のみが義務であり得るのである。己れを全く拋棄することは決して倫理的ではない』(1) と云つた。吾等は茲處に個性構成の根據を有し、個性創造の自由を有する。

此の意味に於て“Know thyself”と云へるソクラテースの言葉、*„Werde was du bist“*と云へるウキ
ンデルバンドの言葉⁽²⁾は現代哲學上の重要を得來たるのである。

(1) Rickert, System der Philosophie, Bd. I, Tübingen 1921, SS. 329—330.

(2) Windelband, a. a. O., S. 333.

倫理的個性は單に倫理的規範の意思的運載者たるのみならず、之れが表現と形成との達せらるる、従つて明瞭なる義務意識に通じ、善と義務とに應じて巧みに行爲するところの人間である。而して斯くの如き倫理的個性は、メイリスの云へるが如く⁽¹⁾、吾等の全社會生活の根柢となる。彼等なくしては社會の如何なる形成も不可能であらう。否な社會に於ける信頼と安靜と秩序と確實とは彼等から出づるのである。社會は慥かに倫理的個性の論理的なる前提である。然しながら倫理的個性、即ち人格は同時に、一切の有價值的なる社會生活の必然的の前提である。社會なくして倫理的個性を考へ得ざるが如く、吾等は又、人格なくして如何なる有價值的なる社會をも考へ得ない。左
右田博士に於ける相關概念としての社會概念と個人概念とは、此の意味に解せらるゝことに依つて別異の重要を得來たらぬであらうか。『人格的なるもの』*„das Persönliche“*と『普遍的なるもの』*„das Allgemeine“*とは一方的・主從的に存在するものではなくて、云はゞ一切の倫理生活が活動

するに必要な兩極⁽²⁾である。人格と社會とは相互 (Freiander) に存在するもの、而して一方は他方の水準を高め、他方は一方の個性を完成せしむるものである。

(1) Mehlis, Probleme der Ethik, Tübingen 1918, SS. 9—10, 91—92.

(2) Ibid., S. 90.

此處に吾等に深甚なる意味を語るは幽玄なるトナルプの思想である。パウル・ナトルプによれば⁽¹⁾個性 (Individuität) と社會 (Gemeinschaft) とは背反的なる對立でもなく、また常に相互作用するところの、然し此の作用に依つて相互に制限し合ふところの生活形態の要素でもない。そは正に一個のものと考へらるべき、極めて嚴密なる相互關係に在るものである。従つて深められたる社會は、同時に深められたる個性を意味し、また反對に深められたる個性は、同時に深められたる社會を意味するのである。また個性と社會は共に單に事實上與へられたるものとして考へらるべきではなく、共に『理念』, „Idee“ として考へらるべきである。即ち既に存在するものではなくて、永遠に生成するものである。靜止的なものではなくて、無限に發展するものである。唯だ純粹に理想的なる個性と社會との兩極的對立は、恰かも積極的及び消極的無限に於けるが如き意味に於てのみ靜止的である。而かも其の發展は消極より積極への、若しくは積極より消極への直線的進展ではなく

て、寧ろ積極・消極の兩面よりする集中的、若くは螺旋線的の擴大と考へらるべきものである。茲に於て兩者は相互に完全に、而かも同時に肯定されることが可能である。蓋し其の一者の肯定はそれと同時に、外觀上それに對立し、而かもそれと競争するが如き他者を認知することに他ならない。實際上社會は、社會化された個性の意識に於てのみ存在する、少くともそれらのもののみ可能である。而して個性は自から、社會の運載者であり創造者であることを意識するのみならず、社會に於て養はれ、社會に於て高めらるゝことを意識する。社會も亦た之れと同時に自から高め、自からを深めるものである。個性と社會との兩者は斯くの如くして、同時に内容充實的であり、具體的であり、實在的である。抽象的でもなく、單なる形式的・偶然的なものでもない。有機的であつて機構的ではない。生けるものであつて死せるものではない。従つて眞の社會とは學的思惟、道德的意思、並に屢々藝術的作品の夫々の世界に於ける、完全に自覺せる生活である。而して此の社會の究極的なる理想的中心點は正に神、若しくは宗教と解せらるべきものであつて、之れに向つては一切のものが、同胞的に對等なる、且つ自由なる地位を占め得るのである。

(1) Natorp, Individuum und Gemeinschaft, Jena 1921, SS. 5—6.

ナトルプが個性と社會とを以て „Idee“ と説き、而して社會の究極的理想の中心點を神と觀ずる

に於て、吾等は直ちに彼れを以て形而上學を説くものと非難してはならぬ。固より吾等は社會論上に於ける *Ideenlehre* を排除せられたる吾が左右田博士の言葉(1)を忘るゝものではない。さりながら、現實に存在するところの經驗的なる個人と社會とを見ることなく、云はゞ潜在的にして有價值的なるべき個性と社會とを見るナトルプに取つては、それ等のものは不斷の生成過程にあり、無限の發展を爲すに於て、必ずや一個の理念と觀じ得らるべく、従つて又、社會生活に於ける究極の理想は之れを『神』と解し、宗教と見るに非難さるべき理由は無い。否な社會的目的論は『聖』、*das Heilige* の領域に於て終結を告ぐるものである(2)。殊にナトルプが個性と社會とを以て密接なる相關 (*Korrelativ*) の關係に在るもの(3)と云へるは吾等が前章に於て考察せるところと一脈の相通ずるものあるを覺ゆるのである。

(1) Soda, *Geld und Wert*, Tübingen 1909, S. 58.

(2) 左右田喜一郎稿、*テレオロギー考察*、思想大正十二年一月號所載、八一頁參照

(3) Natorp, a. a. O., S. 24.

有價值的なる社會に對立するもの、否な概念上密接なる相關關係に在るものは、單なる個人でなくて有價值的なる個性、従つて倫理的なる人格でなければならぬ。社會の意義が文化の完成に盡くと云ひ得べくんば、個人の意味は正に人格の完成に盡くと云はねばならぬ。犠牲と奉仕とは茲處に

哲學上の根據を有し、而して社會に埋没されたる幾多の個性の要求し得べき地位は此處に存するに
はあらざるか。リツケルトも説いて、人格の自律的行爲は人格が己れを犠牲にする時でも、己れ自
身から出發し、それによつて同時に己れを肯定するものである(1)と云つた。單なる己れの拋棄は決
して倫理的なる行爲ではない(2)。より偉大なる人格の爲めに己れを捧ぐるといふ意に於てのみ、友
の爲めに死し、社會の爲めに殉ずるものゝ倫理的價值と歴史的意味とを要求し得るのである(3)。

(1) Rickert, System der Philosophie, Bd. I, Tübingen, 1921, S. 330.

(2) 『愛と認識との出發』に於て犠牲の教、捨身の道を説いた倉田百三氏が、遂に其の師西田天香氏の「燈園生活に疑をいだ
き、最近の論文『積極道』(著書、『靜思』に收む)に於て、反旗を翻へし「弱き善人」たらんよりも「強き超人」たらん
と云へるは、此の意味に於て興味深き思想上の推移であると思ふ。

(3) 約翰傳第十五章第十三節參照

個性問題の考察にあつては左右田博士と共に、内面的には價值ありて之れを導き、外面的には
超個的個性を究竟目標とす(1)と解する吾等は、茲に有價值的なる個性と見たる人格の、超人格的性
質を認めざるを得ない。『偉大なる人格の本質は人格が超人格的價值を自己の中に開展して外界に
形成するところに存する』とウキンデルバンドの云ひしが如く(2)、人格が社會的重要と歴史的の意
味とを有し來たるは、己れ自からに於ける單なる個人的要求を否定し、超個的なる目標を目指せる

に在る。斯く解するに於て吾等はコレラフ・ト・イン・グロフ相關概念としての社會對個人の關係を忘るゝことなく、而かも克くナトルプと共に、深められたる個性は深められたる社會を意味し、又た反對に、深められたる社會は深められたる個性を意味すと云ひ得べきである。

(1) 左右田喜一郎著、文化價值と極限概念、大正十一年刊、四四八頁參照

(2) Windelband, Einleitung in die Philosophie, 2. Aufl., Tübingen 1920, S. 345.

さりながら斯くの如く、有價值的なる個人を以て倫理的なる人格に在るべしとし、且つ斯くの如き人格を以てのみ有價值的なる社會は成立すべきもの、否な社會と個人とは畢竟此の人格の兩面的解釋に他ならずとするの見解(1)に對しては、それが左右田博士の價值哲學に立脚しつゝも尙ほ且つ、『倫理的個性』を以て社會生活の前提とし、進んでは一切の價值生活の基準と見るものなる限り、恐らく左右田博士の側より、道德偏重の獨斷論に陥るものとして、尠なからぬ非難攻撃は加へらるゝであらう。にも拘はらず、豫想し得べき一切の論難を排して余が斯く主張し得るの根據は何處に在るか。個人の意味は人格の完成に盡くと解するによりて一切の人格、従つて上は大衆の先驅者・嚮導者たる天才より、下は身を捧ぐるによつて、直接には文化に參與することなく、世に埋沒せられ、忘却せられ、否な多くの場合に於て、有害なる重荷、無益なる文化の底荷として蔑視せら

る、世の所謂る平均水準者・過剰者に至るまで、一樣に有價值的なる個性として、世上に於ける存在の理由と歴史的の意味とを認め得べしとし、斯く解するに於てのみ、左右田博士の所謂る『社會哲學としての文化主義』を正當に、且つ純眞に理解し得べしとする余の根據は、果して何處に存するか。余の想ひは茲に於て價値の體系に到らざるを得ない。

(1) 此の點更に第五章に於て詳論す。

四

(A)

凡そ價値體系論の考究が哲學基礎論に於ける終結を意味する(1)ものなるに於て、吾等是如何なる哲學者にも、何等かの形式と意味とに於ける價値體系の思想を認め得る。余は茲に社會對個人の問題を考察するにあつては、何等かの意味に於ける價値の體系を求めずしては到底、其の究極の解明の得べからざるを想ひ、現代に於ける最も重要なる二三の思想を吟味し、而してそれ等が、吾等が當面の問題に如何なる光明を與へ得べきやを考察せむと欲する。

(1) Rickert, System der Philosophie, Bd. I, Tübingen 1921, S. 347.

周ねく人の知る如くウキンデルバンドはカントを享け、また之れを發展せしめて價值を論理的・審美的・倫理的・及び形而上的の四種となした⁽¹⁾。然しながら余の窺ひ得たる範圍内に於て最も精細なる價值體系論を組織したものはミュンスターベルヒである。彼れは價值の種類を細分して二十四と爲したが、然し根本的には、傳統的なる四分法を踏襲してゐるのである。是等四種の價值が如何にして統一せられ調整せらるゝやを考ふるに、ミュンスターベルヒに據れば⁽²⁾、論理的・倫理的・及び美的の三價值は其の本源に於て一であり、且つ其の構造は均一なるに拘はらず、吾等は之れに基づいて、獨立せる三個の世界を有し得る。其れ等各々を自から拘束するところの世界形式は結局同一であるにしても、其の形式の三重の實現には其れ自から密着したる、然し互に獨立せる三個の世界現實に導びくものである。即ち第一の論理的價值は知識に依つて把握せられ、第二の倫理的價值は吾等の尊嚴を要求し、而して最後の美的價值は歸依に依つて達せらるゝ。而かも是等の三價值は全く互に等格化するものであつて、其れ自からでは未だ價值を有せざるところの、生活經驗の同じ基本的なる材料から出づるものである。吾等の日常の思考に於ては、稍もすれば論理的價值の集團を以て他の二個の價值の上に位せしめむとするの傾向を有する。然しながら吾等は、之を取行するの權利を有し得ない。若しも吾等が是等諸價價の境界を抹殺することを許すならば、吾等は

如何なる評價をも公正に爲し得ないであらう。唯だ然し、若しも全體としての世界が矛盾とはならず、而かもそれによつて結局無價値のものとならないとすれば、右に述べた如き諸價値はどうかして結合されざるを得ない。ミュンスタールヒに據れば吾等の生 (Leben) の意味は吾等の世界を結局、一として、而して同一として觀ずるや否やに依つて定められ、世界は常に吾等の生に意味を與ふるのみならず、而かも此の事情の下に於ては、全體としての世界は有價値的となる。而して斯くの如く、種々なる價値の世界に統一を與ふるところの生命價値 (Lebenswert) が宗教であり、此の目標への意識的・目的觀的の仕事が哲學なのである。論理的・倫理的・及び美的の、夫々特殊な世界に分裂するところの經驗的世界は、吾等の宗教的及び哲學的信念に依つて維持せられ、而かも其の中に於ては一切の對立が消え失せるところの包括的・究極的世界として現はれる。而して此の究極的世界は諸價値の世界の全體と同一であり、而かも完全なる現實であるが故に、可經驗的なもの、並に超經驗的なもの、間に於ける關係は再び一個の絶對的價値を表示する。それが形而上的價値なのである。宗教は世界に聖價値を與へるところの神を創造し、哲學は絶對價値を世界に與へるところの、永遠なる行爲に於ける究極の基礎を求め、而して是等二個の價値の集團、即ち宗教的なる聖價値と哲學的なる絶對價値とは、共に形而上的價値として、論理的・美的・及び倫理

的の三價値に對立するのである。而してミュンスターベルヒに據れば宗教は、吾等の生活に統一を與へるところの生命價値^{レイベンスマート}であり、哲學は諸價値の統一を求むるところの文化價値^{クルツウフエアート}なのである。

(1) Windelband, Einleitung in die Philosophie, 2. Aufl., Tübingen 1920.

(2) Münsterberg, The Eternal Values, 1911, pp. 349—387.

一切の純價値は最原本的なる業から必然的に生まれ、而かも世界の自己完成の要求からして形而上的價値は生ずると見るミュンスターベルヒに取つては、論理的・倫理的・及び美的の三價値の間に對等(Co-ordination)の關係ありと見ながらも、其れ等を統一するものとして『聖』と『絶對』との形而上的の價値を想ふのは寧ろ當然であらう。さりながらイデアの世界の頂上に善を置くことを以て、従つて又斯くの如き價値の位階(Rangordnung)を想定するに於て、プラトーンをすら形而上學者と見ざるを得ざる吾等は、茲處にミュンスターベルヒに對しても、一價値を以て他價値の上位に置くことに於て、従つて又斯く解するに於ては到底一義的・並立的の文化本然の性質を解し得ざるの故を以て、同様の非難を加へざるを得ないのである。

茲處に從來の位階的價値體系の思想を排除して、意味深きヘーゲルの思想に準據しながら、新しき價値體系の樹立を試みたるはメーリスである。メーリスに據れば(1)價値體系論に於て取扱はるべ

きは量的秩序ではなくて、質的秩序である。彼れは一方に於て科學・國家・法律・道德・政治・經濟・技術の如き、絶えず發展して止まざるもの、即ち發展擴張 (Spannung) の原理に依つて支配されるものを客觀價值又は貢獻價值 (Beitragswerte) として立て、他方に於て宗教・藝術・及び哲學に於けるが如き、進歩發展の理念の介入を許さざるもの、即ち統一 (Einheit) の概念に結び付くものを絶對價值又は完結價值 (Vollendungswerte) として對立せしむる。而して前者はヘーゲルに於ける客觀的精神 (objektiver Geist) に、後者は絶對的精神 (absoluter Geist) に該當するものである。先づ一切の貢獻價值に就いて見るに其れは一個の究極目的の理念に依つて決定される。従つて此の分野に於ては不斷の發展と永遠の精進とが見受けられる。此の意味に於て貢獻價值は又、精進價值 (Annäherungswerte) とも名付けられる。例へば現實の内容を解明しようとする科學は不終結的である。即ち科學は無限の彼方なる一個の目標を目指し、一個の統率觀念 (regulative Idee) に導かれながら、不斷の精進を續けるものである。次に理性國家の理念に於ての人間社會の完成は、同様に無限の過程である。道德に就いても同様に、自由なる自律的人格は人間發展の究極目的として把握せられ得るに過ぎずして、道德の完成されたる時は未だ曾つてなかつたのである。斯くして進歩の理念は貢獻價值に於てのみ其の意義を有するのである。更に又た貢獻價值に依つて成し遂げらるゝ

科學も經濟も、法律も道德も、其の完成は數世紀に互り、また萬人の力に依らねばならぬ。此の意味に於て貢獻價值は又た社會的價值(*soziale Werte*)とも名づけられ得るものである。然るに宗教・藝術・及び哲學に於けるが如き、絶對的若しくは完結的價值に於ては、究極目的又は進歩の理念は不必要である。是等の文化價值は創造されたる夫々の時代に於て、絶對的なる完全終結性が與へられる。例へばミケランゼロの藝術作品はプラトーンの哲學、基督の宗教と共に、それ自から完成されたものである。従つて是等の文化價值が一度び創造さるゝに於ては、其れに關する如何なる變化、如何なる擴大も、正に其の破壊を意味するものである。更に又、絶對的價值は決して社會に依り、また時代に依つて實現されるものではない。却つて常に、個々の超出せる人格の創造に俟たねばならないのである。此の意味に於て絶對的價值は又、非社會的價值(*asoziale Werte*)とも云ひ得るのである。

(1) Mehlis, Lehrbuch der Geschichtsphilosophie, Berlin 1915, SS. 300—306.

do., Die Beziehung zwischen Einzelmensch und Gemeinschaft, (Logos 1922, Bd. XI, Heft 1) SS. 38—40.

斯くの如きメーリスの價值類別論に對しては、既に左右田博士がヘーゲルに於ける仔細なる論究の後に與へられたる非難の如く(1)、そが著しくヘーゲルの思想に相通するものあるの故を以て吾等

も亦た同様なる疑問を懐かざるを得ない。固より宗教と藝術と哲學とは多く、超出したる天才の創造に俟たねばならぬ。従つて又、天才の事業が其れ自から内面的の價値を有し、時代を超え、萬人を絶して、文化價値の王冠を戴いたことは吾等の否むところではない。ミケランゼロの藝術、基督の宗教はプラトーンの哲學と共に、時の流れ、人のどよめきを超えて、其れ自身固有の絶對的價値を具有する。従つて又斯くの如き文化價値が、部分的の改變をも其れ自からの破壊として忌避すべきものなることは、吾等の認めざらむとするも得ざるところである。反對に又、客觀的價値若しくは貢獻價値と稱せらるゝものにして、究極目的に導かれ、従つて發展的・乖離的・社會的ならぬは無い。さりながら吾等は一面に於て、思惟と共に進歩すべき哲學を思ひ、時代と共に推移し發展すべき宗教を思ひ得ぬであらうか。而して又他面に於て、道德の天才を思ひ、法律の思想、經濟の制度に其れ自身固有の内面的・完了的價値を思ひ得ぬであらうか。否な斯くの如く觀じ得るの立場あり得ればこそ、吾等はケーニヒスベルグの大哲に對すと同一の、人格的の尊嚴と歴史的の意味とを、名もなき一ランペに認め得るのである。吾等は茲にメーリスを去りて左右田博士の吟味に移らねばならない。

(1) 左右田喜一郎著、文化價値と極限概念、大正十一年刊、一三一—一三九頁參照

左右田博士に據れば(1)一の價值を以て他の價值の上に置き、若しくは一の價值に、他の價值より種別せらるべき性質上の差異があるのではない。唯だ價值を見、之れを考ふる立場の相違に依りてのみ、一は他より區別せらるべしとの立論をなし得るのである。一切の價值は斯くして二面の解釋を有し得る。即ち一は價值の經過を思ひ、他は價值の意味を探る。一を、課せられたる問題を解釋し之れを實現する方面より觀察するものとすれば、他は端的に價值それ自身の意味を語るものである。而して此の一面の解釋を『文化價值』と名づけ、他面を『創造者價值』„Schöpferwert“と呼ぶ。社會の意義は文化に盡き、個人の意義は創造に終る。而して兩者が同一價值の兩面の解釋なりとの意に於て、創造者價值のあるところ、其處に相照應し、相隨伴し、相合致すべき文化の、存在すべしと信じ得るの認識論的根據がある。斯く解せらるゝに於てのみ文化價值と創造者價值、從つて社會と個人とは、無限の延長に於ける二平行線としての合致・調和を想ひ得るのである。

(1) 左右田喜一郎著、文化價值と極限概念、大正十一年刊、一三九—一七一頁

同上、テレオロギー考察、思想、大正十二年一月號所載、八〇頁

其の論構の雄大なる、而して其の論理の峻嚴なる、吾等は筆を措きて唯だ、其の理解の足らざるをのみ憂ふる。社會に於ける文化が超出したる個人の創造によりて深められ、高めらるゝものなる

に於て、吾等は茲に、創造が個人に於ける究極の意味を語るべきものなるを思ひ、斯くの如き價值に係はらしめらるべき創造者に無限の感嘆を禁じ得ないのである。唯だ茲處に一個の、いと小さき疑問を提出することが許さるゝならば、吾等は創造者たることを得ざる、従つて直接文化に參與し得ざる世の多數の平均水準者の地位と意味とは、之れを如何に解すべきやを問はなければならぬ。超出したる個人は創造によりて創造者價值としての内面的・自足完了的の喜悅を抱くと同時に、社會に於ける文化に貢獻し得るであらう。固より吾等は創造を以てメーリスに於けるが如く、之れを宗教と藝術と哲學との領域にのみ限つてはならぬ。宗教・藝術・哲學に於ては論ずるまでもなく、倫理・經濟・法律・政治・軍事・技術・其他萬般の文化領域に於て、天才を思ひ創造を想はねばならぬ。さりながら、一切の個人は果して社會的・歴史的文化的創造に參與し、斯くして直接文化の完成に貢獻し得るであらうか。否な余の解するところに據れば、直接文化の完成に參與し得るものは少數の天才、然り凡俗を超越したる少數の先覺に過ぎない。世の水準者・大衆者は却つて創造者に仕侍し、社會に身を捧ぐるに依つて、世上に於ける存在の理由を有するのである。個人の意義は創造に盡くと解するによりて、果して吾等は、他人に使役せられつゝあるものゝ内面的の意味を知り、歴史的の意味を悟り得べきであらうか。竊かに惟ふに、超出したる個性を重んずるの價值哲學

は、同時に思想上の貴族主義・天才主義に陥つて、天才をして天才たらしめ、創造者をして創造者たらしむるもの、歴史的意味を、悟り得ざるにはあらざるべきか。個人が個人としての意義以外に何等かの價値に係はらしめらるゝによりて社會に存在し得るの根據あるべし、とせば、そは正は創造者價値以外のものに由るにはあらざるべきか。一切の人格、従つて歴史的文化的創造に參與し得ざる個人にも尙ほ且つ、存在の理由と意味とを與ふべきものが、謂はゆる『社會哲學としての文化主義』なりとすれば、吾等は其れを正當に理解し、且つ其の根據を明かにせむが爲めには、歴史的文化的創造以外に、従つて創造者價値以外に、個人の係はらしめらるべき價値を求むるの要はなかるべきか。斯くして余は、一度びは左右田博士自からに依つて排除せられたるリツケルトの價値體系論(1)に今一度、歸り行くの要なきやを疑ふのである。

(1) 左右田喜一郎著、文化價値と極限概念、大正十一年刊、一四一—一四二頁參照

(B)

ハインリヒ・リツケルトに據れば(1)吾等の歴史的文化的文化生活は不斷の發展過程にあり、而かも價値哲學は常に此の歴史的文化的文化生活と接觸を保つものなるが故に、價値哲學が何等かの價値體系(Wert-systematik)を有し得べしとせば、一面には不斷の歴史的發展に備へ、他面には體系としての超歴

史的意味を有せねばならぬ。然るに歴史的発展を見るに、小息みなき變化は唯だ事象の内容に關してのみ行はれ、其の形式に關しては行はれず、全ての發展に屬するところの形式上の要素は自づから歴史的の發展を脱する。茲に於て價值體系が超歴史的であり、且つ其の内容上發展的なるべしとせば、そは正に一面に於ては形式的であり、他面に於ては開放的であらねばならぬ。斯くしてリツケルトは包括的なる世界全體概念 (Weltallbegriff) の一切の本質的成分たる主觀と客觀、現實的存在と非現實的妥當、形式と内容、に結び付けんが爲めに、諸種の二者擇一 (Alternativen) を採用することに依つて、一方には靜觀的・非社會的・物件的價值を立て、他方には活動的・社會的・人格的價值を立て、超歴史的・開放的なる根本的對立は是れ以上にあるのである。論理的・審美的の價值は前者に屬し、倫理的價值は後者に屬する。一方が、形式が内容を包圍 (umschließen) するところの包圍的形式、並に一元主義的傾向を採るものとすれば、他方は、形式が内容を滲通 (durchdringen) するところの滲通的形式、並に多元主義的傾向を有する。然しながら價值の體系は之れを以ては尙ほ満足し得ない。即ち此の價值の二類別は猶ほ價值體系に必要なべき位階 (Rangordnung) を缺如する。而して斯くの如きラングオールドマンを價值體系に與ふるものは、最高價值概念としての完全終結概念 (Voll-Endungsbegriff) に他ならぬ。

(1) Rickert, System der Philosophie, Bd. I, Tübingen 1921, S. 348 ff.

凡て評價し、其れによりて價值を認めながら、之れを財に實現せむとする主觀は、リツケルトによれば(1)、評價の作用が到達せむと努力する目標をそれ自から設定する。而して其の努力は唯だ彼れが其の目標に現實(wirklich)に到達するか、又は少くとも到達に近づく時にのみ、意義あるものとして彼れに現はれ得るのである。又た各主觀は、それが財に於ける價值實現に努力する限り、其の努力は一個の終結を期待する。而して此の限りに於ては完全終結は、全ての評價並に財に於ける價值實現の努力を支配し、又それと共に評價は終了するのである。今斯くの如き完全終結(Vollendung)の傾向を部分と全體との關係に結び付けて考ふれば、財に於ける價值實現は次の三種の領域に區別し得る。第一は、全體として到底一個の終結に達し得ないところの、即ち唯だ生成的全體(werdende Totalität)に接近するだけで、決して完結的全體(fertige Totalität)に到達し得ないところの不完結的全體(un-endliche Totalität)の領域であり、第二は、部分として一個の完全終結に達し得るところの完全終結的特異(voll-endliche Partikularität)の領域であり、而して第三は、前二者の綜合として考へらるべき、即ち一切の努力が全體に對して一個の終結に達するものと考へらるべき完全終結的全體(voll-endliche Totalität)の領域である。現實全體の學は第一の領域に、藝術作

品は第二の領域に、而して宗教は第三の領域に夫々屬するのである。更に以上三個の領域に時間概念 (Zeitbegriff) を入れて考ふれば、第一の領域に於ける財は將來に價值を想望するものなるが故に之れを將來財 (Zukunftsgüter) と稱し得べく、第二の領域に於ける財は現在に於て完全終結に達するが故に現在財 (Gegenwartsgüter) と稱し得べく、而して第三の領域に於ける財は常に超時間的 (zeitlos) と考へらるべきが故に永久財 (Ewigkeitsgüter) と稱し得べきである。斯くして完全終結の傾向が活動的・人格的範域と、靜觀的・物件的範域とに現はるゝに依つて、一方に於ては倫理的・愛情的・及び人格神教的價值の三段階を思ひ、他方に於ては論理的・美的・及び神秘教的價值の三段階を思ふを得べく、而して吾等は茲處に、一種の位階 (Rangordnung) 又は段階 (Stufenfolge) を有する包括的なる價值の體系に到達し得るのである。

(1) Rickert, a. a. O., Ss. 375—402.

然らば斯くの如き價值の體系より吾等は、當面の問題たる社會と人格とを如何に解し、人格と人格との結合を如何に見るべきか。リツケルトによれば⁽¹⁾、現實的なる主觀として存在するものは常に一個の個體 (Individuum)、又は一回的・特殊的なる一個の『我』Ichである。而してそは常に各々の主觀に於けるが如く、必然的相關者として一の客觀を要求するのみならず、同時に又、本來

的には何等の客觀でもないところの、一の特定な客觀、即ち一の『汝』„Du“詳言すれば他の一回的・個別的なる人格を要求する。一の人格は常に、事實上常に他の人格との結合に於て生活するのみならず、概念的 (begrifflich) にも一の人格は他の人格との結合から分離され得ない。一者は他者なしに考へられ得べくもない。孤立せる我 (isoliertes Ich) は一個の概念上の假想たるに過ぎないのである。斯くして倫理的價値の運載者たる自我若しくは人格は必然的に、社會的自我若しくは社會的人格を表示するものと云ひ得る。斯く解するに於て結局、人格 (Persönlichkeit) は一切の人格的行動の中心點であり、従つて人格は獨自的 (eigene) であると同時に、社會的 (sozial) であると云ひ得るのである。

(1) Rickert, a. a. O., SS. 370—374.

社會と個人との概念に關して吾等は茲に、左右田博士が所謂の相關概念を思ひ、社會と個人との相關關係に就いては、博士が所謂の二面的解釋を想ひ得ぬであらうか。否な個人は創造者價値に係はらしめらるゝに依つて自足完了的の意味を有すと云ひ得るにあらずして、却つて特有なる人格たるに依つて、一面には内的意味を有するにより、社會を離れても其れ自身の満足と尊嚴とを享有し、他面には或るものは直接に、或るものは間接に社會的文化の完成に貢獻するものと云ひ得べき

ではなからうか。斯く解するに於てのみ吾等は不遇と迫害との裡に涙の生涯を送りたる多くの創造者、埋没せられたる無数の民衆の歴史的の意味を知り、内面的の價值を探り得るのではなからうか。

最後に吾等は人格と人格との結合に關し、また異なる職業に従ふものゝ夫々の人格の重要に關し、リツケルトから何を學び得べきやを考察しなければならぬ。リツケルトに據れば⁽¹⁾、夫々の人格は素質及び性の別に従ひ、また生活の地位に従つて著しき差異が現はれる。例へば或る人の生活の意義は、より多く將來財及び之れに對する無限の勞働 (endlose Arbeit) に依つて決定され、之に反して他の人の生活の意義は、より多く現在財、及び之れに關する特異的完全終結 (Partikulare Voll-Endung) に依つて決定さるゝ結果となり得る。之れを男女間に於ける仕事の差異に就いて見るに、男子の仕事は多く將來勞働 (Zukunftsfarbeit) に屬し、女子の仕事は主として現在勞働 (Gegenwartsarbeit) に屬するものである。さりながら吾等は、女子が將來財の完成に參與せざるの故を以て之れを軽く評價してはならぬ。歴史的に發展する表面的文化 (öffentliche Kultur) に對する仕事は固より多く、男子に依つて成就されるであらう。然しながら女子は特異的完全終結 (Partikulare Voll-Endung) を齎らすところの現在財の領域に於ては、特に重要なる價值 (ein Wert) を有するも

のである。又た男女の結合に關しては吾等は之れを將來財に於ける不終結性(Un-Endlichkeit)と現在財に於ける完全終結(Voll-Endung)との結合なりと解するに依つて、男子は女子との最も密接な結合に依り、自からの不終結的全體(un-endliche Totalität)に對する努力を抛棄することなしに、現在に於ける完全終結を感じ、反對に女子は、男子及び其の事業を愛することに依つて、自からの現在的・完結的なる本質を損することなしに、將來に對する一個の眺望を獲得し、斯くして地上に於ける一個の綜合を構成するものと觀じ得るのである。

(1) Rickert, a. a. O., SS. 402—405.

斯くの如き觀點に立ちてのみ吾等は一切の人格、従つて従事せる職業の如何に關せず、又た占め居る社會的地位の如何を論ぜず、皆一樣に夫々の地位と意味とを有すると云ひ得るにはあらざるか。茲處に於て余は、一面に於ては左右田博士の論理に基づき他面に於てはリツケルトの思想に準據し、略ぼ次の如き結論に達し得ると思ふ。

五

不斷なる文化の發展は固より超出したる個人の創造に俟たねばならぬ。創造あるに依つてのみ吾

等は間斷なき文化の歴史的發展を認め得る。さりながら吾等は一民族の文化、一社會の文化が常に少數の天才的なる創造者に依つてのみ造られたと解してはならぬ。幾千年後の今日猶ほ燦として古への文化を誇るナイル河畔のピラミットも、積上げられたる岩石の一つ一つにも餘る尊き生命の犠牲なくしては築かれ得なかつたであらう。世界に於ける一個の宗教も、血腥き殉教者の群を想起せずしては其の歴史を語り得ぬであらう。同様に、今日の經濟的文化は單に少數なる企業者に依つてのみ完成され得なかつたであらう。文化の創造は超出したる個人の出現に俟たねばならぬ、然し其の完成と維持とは萬衆の力に頼らねばならぬ。萬衆を導びき、其の進路を誤らざらしむる天才を尊敬すると同時に、身を捧ぐることに依つて、寧ろ間接に、文化の完成に參與しつゝある萬衆に對して同一の人格的尊嚴を忘れてはならぬ。各般の社會問題は茲處に其の本源を有する。従つて一切の社會思想の批判者たり基準者たる社會哲學は、深く此の點に留意し、之れに満足なる回答を與へ得るにあらざれば到底、一特殊階級の哲學たるにとどまり、絶對の權威を主張し得ぬであらう。

若し夫れ左右田博士に於ける如く、創造者價值と文化價值とが一價值の兩面的解釋なりとすれば創造即文化の方程式が成立せねばならぬ。さりながら一切の文化が天才的創造者の所産と思ひ得ざる吾等は到底斯かる方程式に満足し得べくもない。却つて吾等は創造者をも含めたる多數人格の結

合を以て文化の創造者であり、また完成者・支持者であると主張したい。此の意味に於て社會の意義が文化の完成に盡くと云ひ得べくんば、余は個人の意義は人格の完成に盡くと云はねばならぬ。人格の完成は其れ自身一個の文化でなければならぬ。完成したる人格と觀するに於てのみ、社會より逐はれたるもの、若しくは社會に殉じたるものにも内面的價值ありと云ひ得べきにあらざるか。リツケルトは説いて『人格は獨自的である。然し其の時に於ても猶ほ社會的なる契機を有する』⁽¹⁾と云つた。獨自的なるもの(Das Eigene)は人格の本質である。而して斯くの如き人格を創造することは一切の文化人に課せられたる課題である。凡ての個人は同時に創造者たり得ぬであらう、然し一切の個人は同時に人格たるの望みを抱き得るであらう。ナトルプが謂ふところの『イデーとしての個性、イデーとしての社會』⁽²⁾も畢竟此の意に解せらるべきにあらざるか。若し何人にも創造者價值の喜びに與かり得るの望みありとすれば、それは個性の創造に關するものでなければならぬ⁽³⁾。ゲオルヒ・ブルクハルトは個性の創造を以て藝術作品に喩へ、『個々の人間は彼れ自からを作品に作り上ぐることに依つて不滅となる。』『作品に於てのみ、而して唯だ作品に依つてのみ、各個人は其の完全終結に達し、而して其の限りに於てのみ個人が一普遍者中の個別的全體となり得るのである』⁽⁴⁾と云つた。人格は一面に於て獨自的であると同時に、他面に於ては社會的でなければ

ならぬ。従つて一個の人格の出現と完成は、社會的文化の高上と強みとを意味する。然しながら一切の人格はそのまゝ直ちに社會に受け入れらるゝものではない。恰かも左右田博士に於ける創造者價値の文化價値に對するが如く、人格の獨立的價値は必ずしも常に、直ちに社會的なる、若しくは超個的なる文化價値に調和するのではない。吾等は其處に一個の社會的目的論を入れてのみ、是等兩者の一致、偕調を想ひ得るのである。人格の内面的・自足完了の意味が、究極に於て社會的文化に參與すと想ひながらも、猶ほ且つ社會を離れて存すべしと見るに於て、余は茲に、一個の *contradictio in adjecto* が許さるゝならば、社會的文化より獨立し、而かも究極に於て一致すべき『人格文化』, „Persönlichkeitskultur“ (5) を認めむと欲するのである。

(1) Rickert, System der Philosophie, Bd. I, Tübingen 1921, S. 373.

(2) Natorp, Individuum und Gemeinschaft, Jena 1921, S. 6.

(3) G. Burchardt, Individuum und Welt als Werk, Eine Grundlegung der Kulturphilosophie, 1920, S. 55.

(4) Ibid., S. 54.

(5) „Persönlichkeitskultur“なる語は天才に於ける *Einsamkeit* の内的意味を表はす爲めに、メーリスによつて用ひられた (Logos, 1922, Bd. XI, Heft I. S. 54) ものである。然し本篇に於ては嘗に天才にのみ限らず、一切の人格の内的意味に解した。従つて其の意味はメーリスに於けるよりも一層廣く、且つ重要である。

價值と文化とは茲處に二つの方面に解釋せられ得る。一は内的・獨自的・自足完了的の意味であり、他は外的・超個的の意味である。一の人格のあるところ其處に吾等は、一面に於ては内的・獨自的の價值を思ひ、他面に於ては外的・社會的の價值を思ふ。社會的の價值を文化價值と名づくべくんば、内的の價值は之れを『人格價值』, *Personlichkeitswert* (1) と呼ばねばならぬ。余が人格文化を思ひ、而して之れを社會的文化に對立せしむるは實は此の、獨自的なる人格價值を認むるが故である。人格文化は内的價值の顯現であり、社會的文化は外的價值の精華である。畢竟一切の價值は人格に集中し、而して人格より發散する。吾等は此の集中の方面を名づけて人格文化と云ひ、發散の方面を稱して社會的文化と呼ぶ。ジムメルの言葉を以て云へば、茲に所謂る社會的文化とは『發表せられ、形成せられ、理想的に存立し、而かも現實的に存在するところの一切の複合體にして、一時代の文化所有を構成するところの客觀文化 *objektive Kultur*』であり、茲に所謂る人格文化とは『各個人が擴さと深さとに従つて夫々の内容を分有するところの主觀文化 *subjektive Kultur*』⁽²⁾である。一切の人格價值が究極に於て文化價值に照應せられ、それに合致するが如く、一切の人格文化は同様に社會的文化に伴はねばならぬ。唯だ然し文化價值を離れて獨自的なる人格價值の存立するを思ひ得るが如く、社會的文化を離れても猶ほ且つ人格文化の存立し得べきを思ひ

得るに於て、吾等は社會を離れての孤獨なる天才の意味と、創造に參與し得ずしても猶ほ且つ獨自的なる人格たり得べしとの意に於て、世に埋没せられたる大衆の存在の理由と意味とを認め得るのである。本篇に於ける余が立論の價值體系的根據は畢竟此處に存するのである。

(1) „*Persönlichkeitswert*“なる語はメーリスの『倫理學の問題』(*Probleme der Ethik*, S. 19)より得たるものである。但し余は之れを以つて生命そのものゝ價值を認めむとする „*Lebenswert*“とは全く異なる意義を有せしむる。

(2) Simmel, *Philosophische Kultur*, Leipzig 1911, S. 278.

個人とは人格の一面の解釋であり、社會とは人格の他面の解釋である。人格なきの社會を思ひ得ざるが如く、社會なきの人格を思ひ得ない。唯だ後の場合に於て、社會を離れて偉大なる人格を思ひ得るは其の内面的意味に於てあり、又た獨自性の餘りに顯著なるが故である。各個人に課せられたる最高の課題は、如何にして獨自的なる人格を完成するかにある。天才は創造に依つて個性を完成し、大衆は交互の奉仕に依つて各々獨自的なる人格を取得する。人は創造と奉仕とに依つて自からの人格を形成し、社會の水準を高める。斯くして人格は各人のイデーであり、規範であり、而してまた同時に文化である。イデーとしての人格を思ふとき其處に據つて以て係はらしめらるべき何等かの内面的價值あるを思ひ、其が實現の精華としては獨自的なる人格の文化を思はざるを得ない。人格の内的價值は文化價值に照應し、其の獨自的文化は社會的文化に一致する。斯くして吾等

は、一面に於ては左右田博士と共に『人格なきの文化價值はなく、文化價值なきの人格はあり得ない』⁽¹⁾と云ひ得ると同時に、他面に於てはナトルプと共に『深められたる個性は深められたる社會を、又反對に、深められたる社會は深められたる個性を意味する』⁽²⁾と云ひ得る。而してまた余は此の意味に於て、ウキンデルバンドが謂はゆる『偉大なる人格は個人的要求を拒否する』⁽³⁾との言葉を有意義に解し得るにあらざるかと思ふのである⁽⁴⁾。

(1) 左右田喜一郎著、文化價值と極限概念、大正十一年刊、六〇頁

(2) Natorp, Individuum und Gemeinschaft, Jena 1921, S. 5.

(3) Windelband, Einleitung in die Philosophie, 2. Aufl., Tübingen 1920, S. 345.

(4) 最近手にした書に Hermann Glockner, Die Ethische-Politische Persönlichkeit des Philosophen, Tübingen 1922. と云ふのがある。氏はその中に於て『吾等の目標は人格に在る、而かも全く特定の人格に在る。然しながら吾等が斯かる人格の特有性に達し得るは唯だ人格一般の何たるやを解し得た時である』と云つてゐる (a. a. O. S. 40)。左右田博士が別の機會に於て、特殊なる文化に對する文化一般を力説せられたる (明星、大正十二年一月號所載論文『階級文化』) を想ひ合はす時、右グロツクナーの言葉は余に取つて頗る興味深きものがある。余が前章に於て、獨自的なるべき人格に一種の超人格性を認めむとしたるは暗に、特殊人格を超越したる『人格一般』*Persönlichkeit überhaupt* を想ひ得たが爲めに他ならぬ。今茲に再び人格の超個性を論ずるに於て、人格一般の究明の必要を痛切に感ずるのである。

試みに二三の思想家に就いて見るに、ランゲが所謂『利己主義を屈服する偉大なる理念』も、またミュンスターベルヒが個別的見地と團體的見地とを峻別して、『各個人は純粹なる超個的意思を分有するところの立場を指すべきであ

る。斯くて人類社會の究極の統率目標は、一切の個人が超個的意思に、換言すれば純粹なる評價に従つて意欲するところの立場への推移である。此の目標へ近づくものは進歩であり、此の目標から遠ざかるものは退歩である』(The Eternal Values, 1911, p. 283)と云へるも、また自から形而上的社會哲學者なりと稱しつゝあるイー・シエー・アーウキックが自然科學的社會觀を排して、『眞の個人は意欲するところの個人ではなくて、想望するところの靈魂である。云はゞ個人は自我を求むるものではなくて、神を求むべきである。眞の個人は自然的自我並に社會的人格の内部に存在するところの精神的の實在である』(E. J. Urwick, A Philosophy of Social Progress, London 1920, 2nd ed., pp. 181—182)と云へるが如き、更に又、『富と權力との不公平な分配から生ずる罪惡と不幸とを認め、より高き社會狀態への可能を信じ、而してそれが達成に努力せむと欲する人々』に、情熱に燃えた『進歩と貧困』一卷を贈らむとしたヘンリー・ジョージが、社會を進み行く舟に喩へて、漕手間の軋轢、並びに共同目標の喪失は其の進行を妨ぐると云へるが如き(Progress and Poverty, authorised ed. p. 359)、夫々不完全ながらも具體的に、此の問題に觸れたものであると思ふ。吾等は個性没却の罪を犯すことなく、而かも克く、超個的なる人格一般を認めねばならぬ。斯くして『人格一般』の究明は同時に余が今後の問題でなければならぬ。

然らば斯くの如き人格の立場より吾等は如何にして克く、前に掲げたるが如き事實問題を解し得るか。個人と個人、個人と社會との偕調に關しては吾等は到底アダム・スミスの自然論、ライブニッツの形而上學に満足し得ない。又た個人意識に於ける一種の社會組織を考ふるによりて自愛即他愛の教を立つる西田博士に、吾等の論理的要求を満足せしめ得べくもない(1)。唯だ社會と個人とを一人格の兩面と解するに於てのみ吾等は克く、個人と社會との偕調を思ひ、而して他を排すること

なしに克く、人格の獨自性を保持し得るを想ひ得るのである。而して吾等が茲に兩者の究極的一致を想ふの認識論的根據に於ては左右田博士の高見⁽²⁾より一步と雖も離脱することを許さないのである。

(1) 本篇第一章參照

(2) 左右田喜一郎、前掲書一四八一—一七二頁

然らば次に服従と犠牲とは之れを如何に解すべきか。吾等が一度び人格の尊嚴に目醒むるの時、如何に偉大なる人格と雖も他の人格を自己に服従せしめ、若しくは其の犠牲を要求し得るの權利は先天的にあり得ない。最も低き又小さき人格と雖も、吾等はそれに對して人格の自由と尊嚴とを認めねばならぬ。然しながら低度の人格は文化の歸趨を知らず、又た直接文化價値の實現に參與し得べくもない。茲に於て彼等は何等かの意味に於ける服従と犠牲とを社會に捧ぐることに依つて彼等自からの人格を享有し、無意識的に、然し間接的に、社會文化の完成に參與し得るのである。文化の完成が創造者のみの事業にあらざる限り、吾等は此の意味に於ける大衆の服従と犠牲とを要求する。而かも吾等は自律的なる人格の立場に立つの時、而して又獨自的なる人格文化を思ふの時、最早や服従は服従にあらず、犠牲は犠牲でなく。一切の人格的行動は自己目的 (Selbstzweck) そのも

のである。カントは教へて云つた。「道德的法則への單なる服従には何の崇高も伴はない。彼れ自から同時に立法的であり、而かも唯だ其の理由に基づきて服従すると云ふところにのみ、一切の人格は尊嚴と崇高とを有し得る」(1)と。斯くの如き立場に於てのみ吾等は、文化社會に於ては絶對の服従、絶對の犠牲を許さず、一個の人格と雖も世に埋没せらるゝを許さずと云ひ得るのである。左
右田博士の文化主義に於ける所謂『一義的・並列的』の意味も畢竟此の意に解せらるべきにはあらざるか。ソクラテースの毒杯、基督の十字架も斯くの如き自律的人格の立場よりするにあらざれば吾等は到底、其の内的の深き意味と法悦とを窺ひ得ぬであらう。

(1) Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten (Reclam-Ausgabe) S. 78.

最後に人格の自由と社會との關係も亦た自づから解明せられ得る。創造は自由である。然しながら自由が創造に盡きるならば、世の大衆は如何にして此の自由を味ひ得べきであらうか。否な吾等は之れを人格の自律的行動と解するに於てのみ、人格の自由と社會とは常に必ず調和を保つべきものと云ひ得るのである。社會は個人意思の集合なるが故に個人の自由が確保せられるのではない。目的意識的の行動と觀するに於てのみ人格の自由は保證せらるゝのである。

之れを近時の社會問題に關連して考ふれば勞働者は人格の自由を得んが爲めに不合理なる壓迫よ

り解放されんとし、婦人は個性の完成の爲めに不合理なる家庭よりの解放を要求せんとする。固より吾等はコムトに於けるが如き意味のプロレタリアの文化、婦人の文化を豫期するものではない。否な吾等は、プロレタリアは勞働に依つて間接に文化の完成に貢献し、婦人は現在財の完成者として、夫々代置され難き社會的・歴史的の意味と獨立的なる人格文化とを有すると主張せんと欲する。社會に於ける不合理に關しては吾等は、何處迄も合理化の過程を追はねばならぬ。さりながら吾等は、一面に於ては社會にのみ價值ありとして個人の自由を束縛するのゾチアリズムに陥るを許さず、他面に於ては個人の自由を尊重するの餘り、各人が皆一樣に産業の主宰者たるべしとの要求より、直ちにギルド・ソシアリズムに走つてはならぬ。企業は他の文化生活の範域に於けると同様に、經濟的天才の創造に俟たねばならぬ。大衆はそれに參與するに依つてのみ、經濟的文化價值の實現に、間接に貢献し得るのである。勞働者の地位は畢竟此の意に解さるべきものであり、而かも斯く解するに於てのみ、天才に於けると同様の、歴史的意味と人格的尊嚴とを要求し得るのである。ベルンシュタイン等のカント化運動は云ふまでもなく茲處に其の根據を有するのである。『社會哲學としての文化主義』は斯く解せらるゝに於て、消極的には、各人の存在理由を認めながら、創造的天才の領域を説くにとゞまり、世の大衆・水準者の存在し得べき意味と地位とを忘れたりと

の非難を免がれ、而して積極的には、一切の社會思想の基準となり、兼ねては『哲學なきの社會政策』に哲學的根據を與へ得るにあらざるかと思ふのである。

余は斯く解するに於て自から獨斷の迷夢に襲はれたるにあらざるか。或は又自から解し得たりとして其の實何ものをも解し得ざる愚を學びたるにあらざるか。そは正に余が今後の深き省察と研鑽とに俟たねばならぬ。唯だ然しながら、余が如上の論構にして幸に大過なきを得たりとせば、價值の體系は畢竟人格の立場に於て、即ち一面には左右田博士に於ける文化價值對創造者價值の論理に基づき、他面に於てはリツケルトに於ける人格結合の原理を攝取することに依りて樹立せらるべきもの、而して余が謂はゆる社會哲學のグランドテーマとしての社會對個人の問題は、茲處に究極の解明を得べきにあらざるかと考ふるに過ぎぬ。

* * * * *

* * * * *

„Im Reiche der Zwecke hat alles entweder einen Preis, oder eine Würde.

Was einen Preis hat, an dessen Stelle kann auch etwas anderes als Äquivalent

gesetzt werden; was dagegen über allen Preis erhaben ist, mithin kein Äquivalent verstatet, das hat eine Würde.“ ——Immanuel Kant.

(大正十二年一月稿)